

「Colorectal Surgery Illustrated ; A Focused Approach」

Edited by Joel J. Bauer, et al

国立がんセンター医長・外科

杉 原 健 一

外科医になりたてのころは、手術の前には必ず手術書に目を通して、局面ごとにポイントを押さえた、大きくはっきりしている図が描かれ、説明文も要領を得た簡潔な本が重宝であった。その後、自分なりの経験を積むにつれ、手術書を参考にする機会も減ってきた。その理由の1つには、経験を積んだためその領域で手術書を参考にする必要がなくなったこともあるが、経験と照らし合わせて手術書の記載と合致しない点があること、ないしは、著者の経験に基づいて記載されたポイントが納得できない場合があることにもよる。

個々の外科医が創意工夫をして、より安全な、より確実な手術をめざすことは大切なことである。新しい手法を考え出しても、それが効果的か否かは長年の月日を経ないと不安なものである。一方、それだけでは独善に陥ったり、自己満足に浸ってしまう危険がある。経験豊富な先輩外科医の手術を見学するたびに、常に自分の手術に加えられる何らかのアイデアが得られるものである。

Bauer の編集による「Colorectal Surgery Illustrated」は Mt. Sinai

School of Medicine, Cleveland Clinic, Brown University, Mayo Clinic, University of Minnesota, Lahey Clinic Medical Center などで活躍している経験豊富な 30 人の大腸外科専門医が執筆を担当しており、大腸・肛門外科を専門にしようとしている医師、それを専門として標榜している医師、消化器外科の経験を十分に積んでいるが大腸外科はまだ自信がない医師のために作られた手術書である。したがって、外科の基礎トレーニング中の医師には専門的すぎるかもしれない。

本書は「Anatomy and Introductory Topics」、「Abdominal Procedures」、「Intestinal Stomas」、「Anorectal Procedures」、「Endoscopy」の 5 部門から構成されており、その特徴は、大腸疾患の解説や手術適応などはほかの教科書や成書に譲って、手術手技を中心として編纂されている。アメリカで大腸疾患の外科的治療をリードしてきた病院の専門医が、自分の実際に行っている手術をその流れに沿って要所要所を、右のページには明確でシンプルな大きな図で、左のページには簡潔な文で解説している。更に、説明文には

“FOCUS”として特に注意すべき手術のポイントを抜粋している。肛門疾患や大腸内視鏡検査でのポリープ切除から骨盤内リンパ節郭清、骨盤内臓全摘術まで、ほとんどすべての大腸・肛門手術が網羅されている。

大腸では、外科手術の対象となる疾患の種類が多い割には臓器が限られているため、同じ操作が繰り返して出てくることから、自然にその手順が記憶に刻まれるメリットがある。一方、同一操作におけるポイントごとに、それぞれの著者による工夫も知ることができる。また、double stapling 法や器械による J pouch 法など様々な器械吻合法も掲載されている。

本書の使い方としては、これから大腸外科の専門をめざす若い医師には時間のあるときにゆっくり熟読することを薦める。また、消化器外科医として既に十分な経験を積んでいる医師には、不慣れであると思われる手術の直前に簡単に目を通すことで得るものがある有益な手術書と思う。

● 429 pp. with figs. 1993 ¥19,600

Mosby-Year Book, Inc. 刊 日本総発売元 医学書院洋書部 (☎ 03-3817-5670)